北山文化圏センター整備設計業務　企画提案書

株式会社AMS設計・株式会社ホープ設計　共同企業体

０１　課題の認識・実施方針

０２　全体デザインの考え方

０３　完成イメージ図

０４　今帰仁村中央公民館について

０５　今帰仁村コミュニティセンターについて

０６　今帰仁村保健センターについて

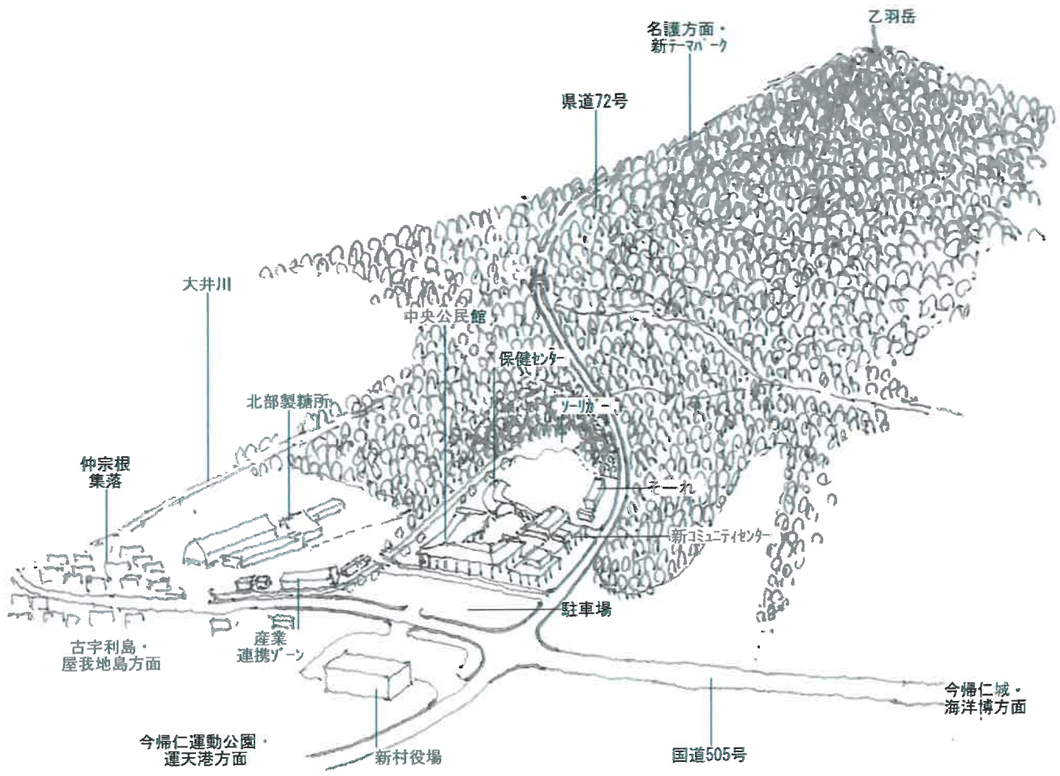
０７　多目的広場について

０８　ソーリガー及び水路について

０９　駐車場及びエリア内動線について

１０　産業連携ゾーンとの連携に関する考え方

その他の提案：計画の進め方



課題の認識・実施方針

1. 計画策定の目的・意義

● 目的

村役場の新築など、公共施設の再編や既存施設の有効活用等を含めて、一帯を今帰仁村の潜在的資源や魅力を活かした交流拠点としての利活用に向けた整備計画を策定することが求められている。

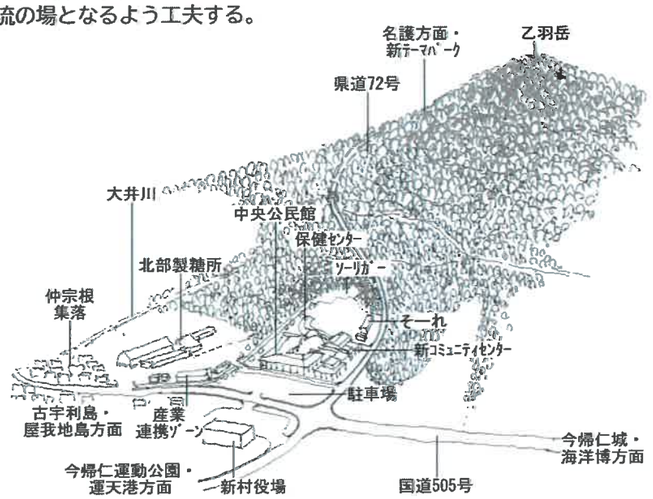
● 計画の目標

豊かな自然に抱かれて築き上げてきた伝統文化や、
村民相互のつながりを大切にし、
暮らしと交流の新しい拠点をつくり上げる！

2. 今帰仁村の潜在的資源

今帰仁村では、山から原、集落、低地農地、ハンタ、イノー、ピシ、沖へとつながる豊かな環境の中で、村民が相互に信頼し合いながら暮らしてきた。このひとつながりの環境単位である「やんばる型土地利用」の中で展開されるくらしや生活環境こそ今帰仁村の潜在的な資源である。

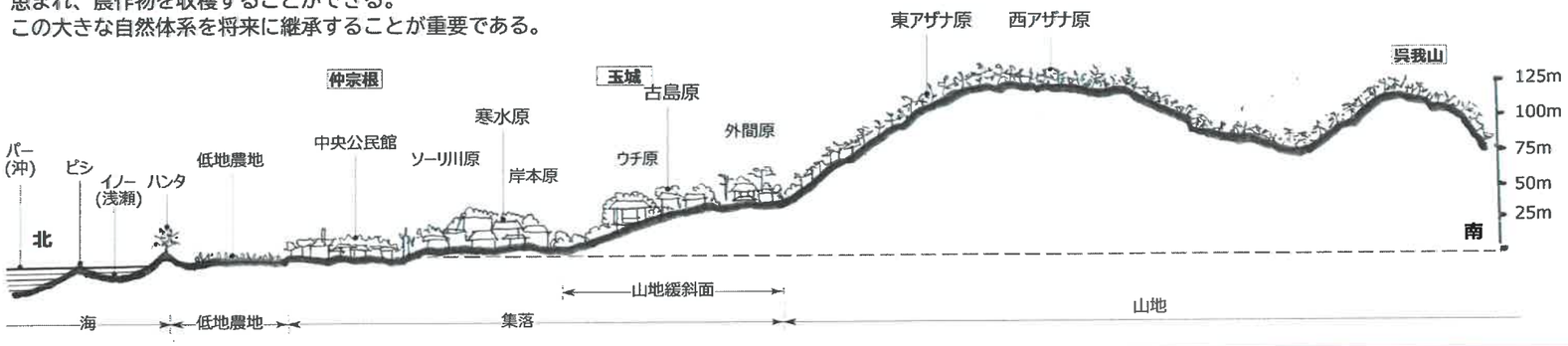
北山文化圏センターは、乙羽岳から農地や海につながる緑の構造を大切にし、複数の施設が有機的につながり、村民の暮らしを支え、外来者との交流の場となるよう工夫する。



3. やんばる型土地利用

自然と一体的に営まれてきたくらし・生活環境の構造

仲宗根、ソーリ川原、外間原、玉城、西アザナ原の縦断図
仲宗根の後背に急峻な森林が聳えているため、低地の集落は豊かな湧水に恵まれ、農作物を収穫することができる。
この大きな自然体系を将来に継承することが重要である。



4. 課題整理

● 今帰仁村の課題

【観光関連】
- 今帰仁城、古宇利島、海洋博公園、美ら海水族館など、周辺に観光客の往来はあるがそれら地域資源を活かしたワンストップできる観光拠点がない。
- 今帰仁村には、教育旅行を受け入れるための大人数を収容できる宿泊施設がない。
- 今帰仁城、古宇利島の2大観光拠点の他にもある、魅力的な地域資源を観光産業に活かしきれていない。
- 地域内の観光資源を簡便に周遊できて、有効的な経済循環に貢献できるまちなかの拠点施設がない。

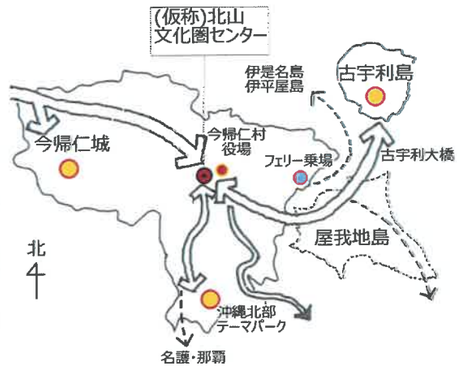
【くらし・経済】
- 周辺を回遊する観光客を滞在させることができず、消費の機会を逃している。
- 急速な観光需要の伸びに伴う土地利用や開発が進行し、緑地面積が減少傾向にある
- 開発の進行による、将来的な自然環境の保全とバランスが危惧されている。

● まちなかエリアの課題

【まちなかの公共施設】
- 老朽化が進み、コンクリート剥離が目立つが、耐震改修ができていない。
- まちなかの公共施設は、経年的な利用上の用途に対応できていない問題がある。
- 今帰仁の駅そーれは駐車場が少ないため、道の駅登録ができない。
  限られた敷地は増築を重ねており、将来的な利用拡大を図りにくい状態である。
- 保健センターは、一部サービスが新庁舎へ移動している。機能の見直しが必要とされている。

【まちなかエリア全体】
- まちなかの公共施設エリアは、個別又エリア全域の施設内容と複合利用の調整を必要としている。
- エリア整備から年数を経ているため、敷地内のインフラ設備の見直しや省エネルギー対策の検討ができていない。
- ソーリガーなどの水辺の環境やエリア全域の植栽などを守り・育てる組織の運営活動がない。
  手入れされていない植栽エリアは、人が近寄りがたい場所となっている。

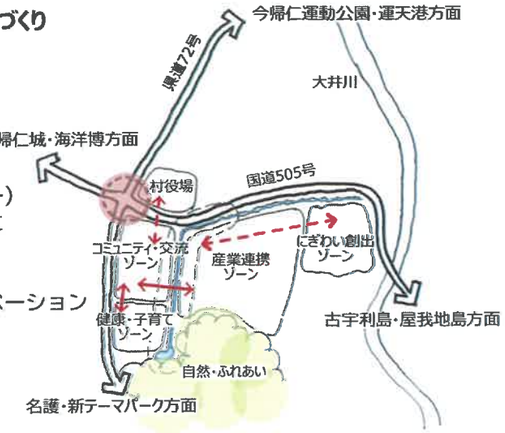
● くらしの拠点をみなおす
- H17年古宇利島大橋が整備され、来年には新たな観光地が開業を迎える中、新たなまちなかの公共施設の役割を検証し、再構築する時を迎えている。
- 次の世代に受けつがれる、（仮）北山文化圏センターは、まちなかを核とした場所と人をつなぐの新たな村の構造を創出する。



5. 大きな自然に包まれた生活環境の再生

● 今帰仁村の自然とまちなかの拠点づくり
- 北部の豊かな自然を活用したやんばる型土地利用は、豊富な農作物と農村のくらしを育んできた。
- 風土に根差し、屋敷林に囲まれた落ち着いた集落や信仰の森は、これからも将来「あるべき姿」を伝えていかなければならない先祖伝来の大切な資源である。
- 1970年代に「住民自治」の拠点としてスタートした今帰仁村中央公民館はこの先も周辺域の自然と連続性を維持しながら、環境共生に配慮した地域づくりを目指す。

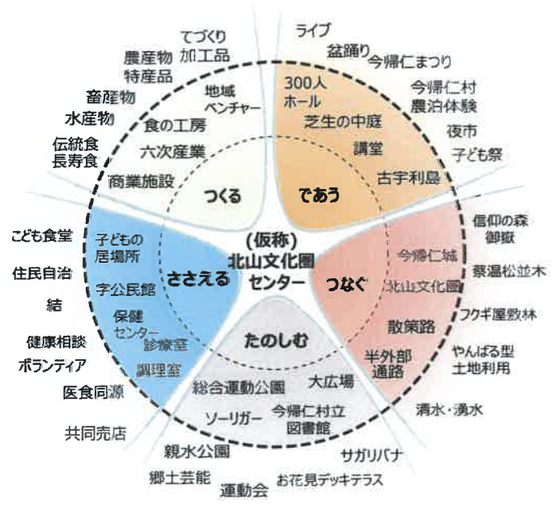
● 新たなまちなかの魅力づくり
- 緑の修景
- ソーリガーと親水空間
- サガリバナのお花見
- 新しいコミュニティセンター（バリアフリー）
- 耐震改修と竣工時の姿に戻す、中央公民館
- 保健センターを健康と子どもの居場所にリノベーション
- 3つの広場をつなぐ



● 今帰仁村の潜在的資源の発掘

地域の潜在的資源の発掘とそれらを活かす北山文化圏センターの役割

・村の中心で展開されるさまざまな活動をつなぎ合わせる拠点となることが求められている



全体計画図

S=1:1000

北山文化圏センター

約50年前、今帰仁村の豊かな自然環境と、その中で培われてきた生活文化に触発され、沖縄の伝統文化を空間の原型ともいうべき建築へ昇華させた今帰仁村中央公民館。
今帰仁村中央公民館が示した空間構成を大切に受け継ぎながら、新しい機能を加えて、北山文化圏センターの中心となる建築を提案します。
今帰仁村コミュニティセンターは、中央公民館と一体化するような空間構成としています。２つの建物は、別棟ではありますが、半外部空間がつながり、実際の使い方は一つの建築として機能します。
北山文化圏センターは、これらの施設に加えて、保健センターや、民間敷地の産業連携ゾーンなどと有機的な連携で活動を展開します。
この空間から新しい今帰仁村のムラづくりの動きが始まります。

1. 今帰仁村中央公民館の建築的意味

今帰仁村中央公民館は、下記の3つの特徴的な価値を有していると考える。

1）建築的価値-1　：沖縄の伝統的空間を現代建築の原型として提示

・沖縄固有の生活文化：開放的なくらし、集落のつながり、相互相頼の共同体。
・伝統的生活空間：住居の間取り、雨端空間に見られる内と外のつながり。
・地形、大地の構造：山原型土地利用

などを読み込んで、コンクリートや、ブロックという沖縄を代表する素材を使って、空間構成の原型として具体的な空間を提示した。

2）建築的価値-2　：くらしの中心となる空間を新たに創出

・公民館単体ではなく、各字の公民館や、様々な公共施設と連携し、総合的に村民の生活基盤で整えていくことを目指し、いわゆる「村民センター」として、交流と、住民の自主活動と、公共サービスが行われる空間として実現した。
・内と外の連続したつながり、豊かな外部空間の創出。

3）建築的価値-3　：自然植生を活用した断熱、通風を工夫した環境建築の嚆矢としての存在

・ブーゲンビリアを屋根にはわせ、断熱効果と修景効果として活用。
・コンクリートの大屋根の下に、入れ子状に内部空間をつくり、できるだけ自然の風を利用した温熱環境づくりを実践している。

ガジュマル建築：ガジュマルの大木の下、涼しい風が通り抜ける状況を建築化した。

屋根の上で植物が葉を拡げ、強い日射しから躯体を護っている。

大きなコンクリートの屋根の下に、入れ子状に内部空間がつくられている。

2. 今帰仁村中央公民館の課題

1）構造的強度についての評価

・耐震診断による構造躯体の評価。
・耐震安全性を確保するための調査・対策

2）経年による劣化の進行

・築後半世紀近くを経て、コンクリートブロック、コンクリート躯体、鉄筋などの劣化が進行している。
・劣化の情状の正確な調査を進め、適確な対策を考える。
　すでに、東京理科大学の今本教授により、調査が行なわれている。
　今本教授と連携して、劣化対策を進める。

3. 今帰仁村中央公民館の再生方針

1）１で挙げた３つの建築的価値を再評価し、再生計画を立てる

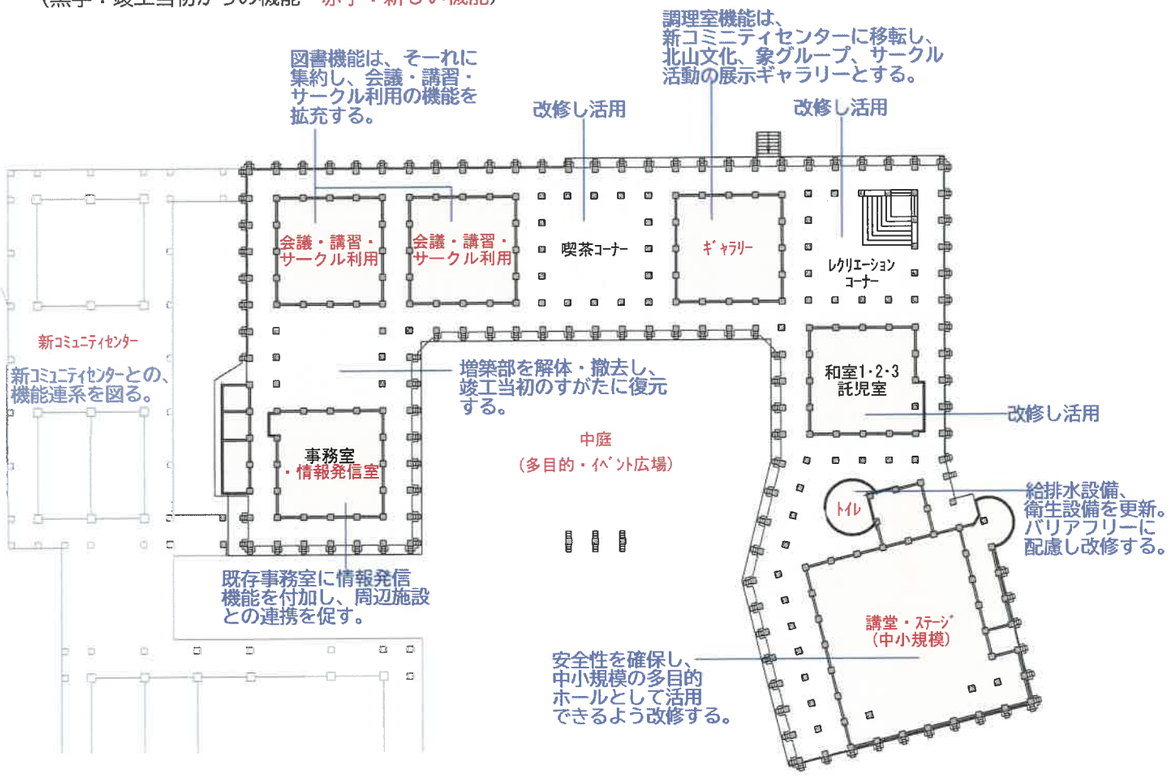
2）具体的な再生方針の決定

２で挙げた課題を克服するための計画と、各専門分野のエキスパートとの協働により、具体的な再生方針を決定していく。

4. 今帰仁村中央公民館の再生計画

1）竣工当時の平面計画を優先し、増築部を撤去し、新しい使い方に対応した空間と機能を整える。

（黒字：竣工当初からの機能　赤字：新しい機能）

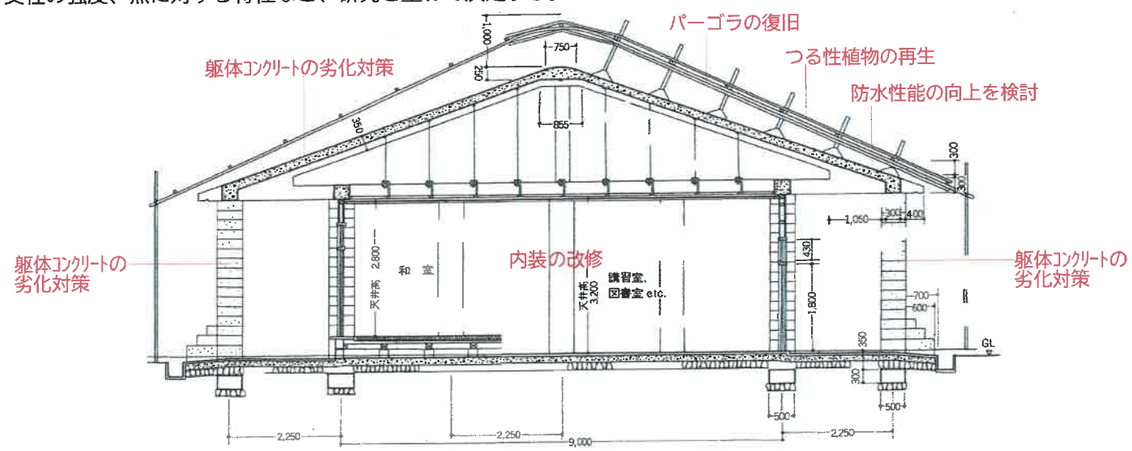


2）安全性を確保するためのコンクリートの再生計画

・劣化の状況の正確な把握

3）パーゴラの再生計画

・支柱の強度、熱に対する特性など、研究を重ねて決定する。



今帰仁村コミュニティセンターについて

1. 基本的考え方

今帰仁村コミュニティセンターは、今帰仁村中央公民館の不足機能を補いながら、一体となって、新しい今帰仁づくり活動である北山文化圏センターの活動拠点となる施設である。

【設計の基本理念】

- 今帰仁の潜在的な資源を活用し、今帰仁にふさわしい姿をつくる
- 中央公民館の建築理念、空間構成、意匠表現を尊重する
- 中央公民館と一体的な利用ができるような空間構成とする

【実現すべき建築のあり方】

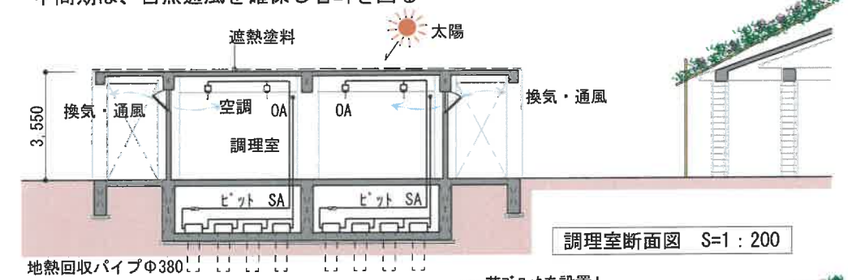
- みんなが気軽に集まる世代を超えた居場所となること
- みんなが、様々な活動を展開する場所となること
- みんなをつなぐ情報の拠点となること
- みんなの暮らしを支える場所となること

【備えるべき要件】

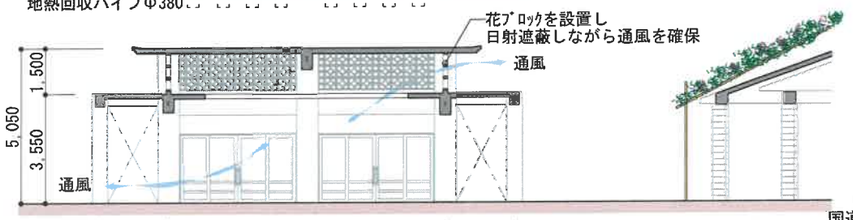
- 気軽に立ち寄れ、自由に出入りできること
- 大きな半外部空間を有すること
- 環境に負荷をできるだけ掛けない環境建築であること
- 地域内の他の施設と円滑につながっていること

【環境共生について】

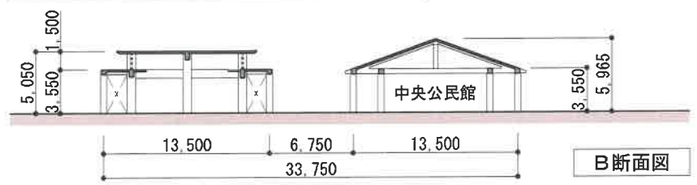
- 空調方式として空冷HPﾊﾟｯｹｰｼﾞｴｱｺﾝ ＋ 地熱交換ﾊﾟｲﾌﾟを採用
- 中間期は、自然通風を確保し省ｴﾈを図る



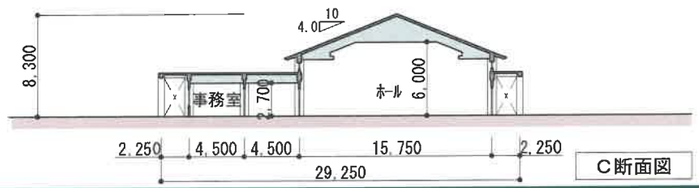
調理室断面図　S=1：200



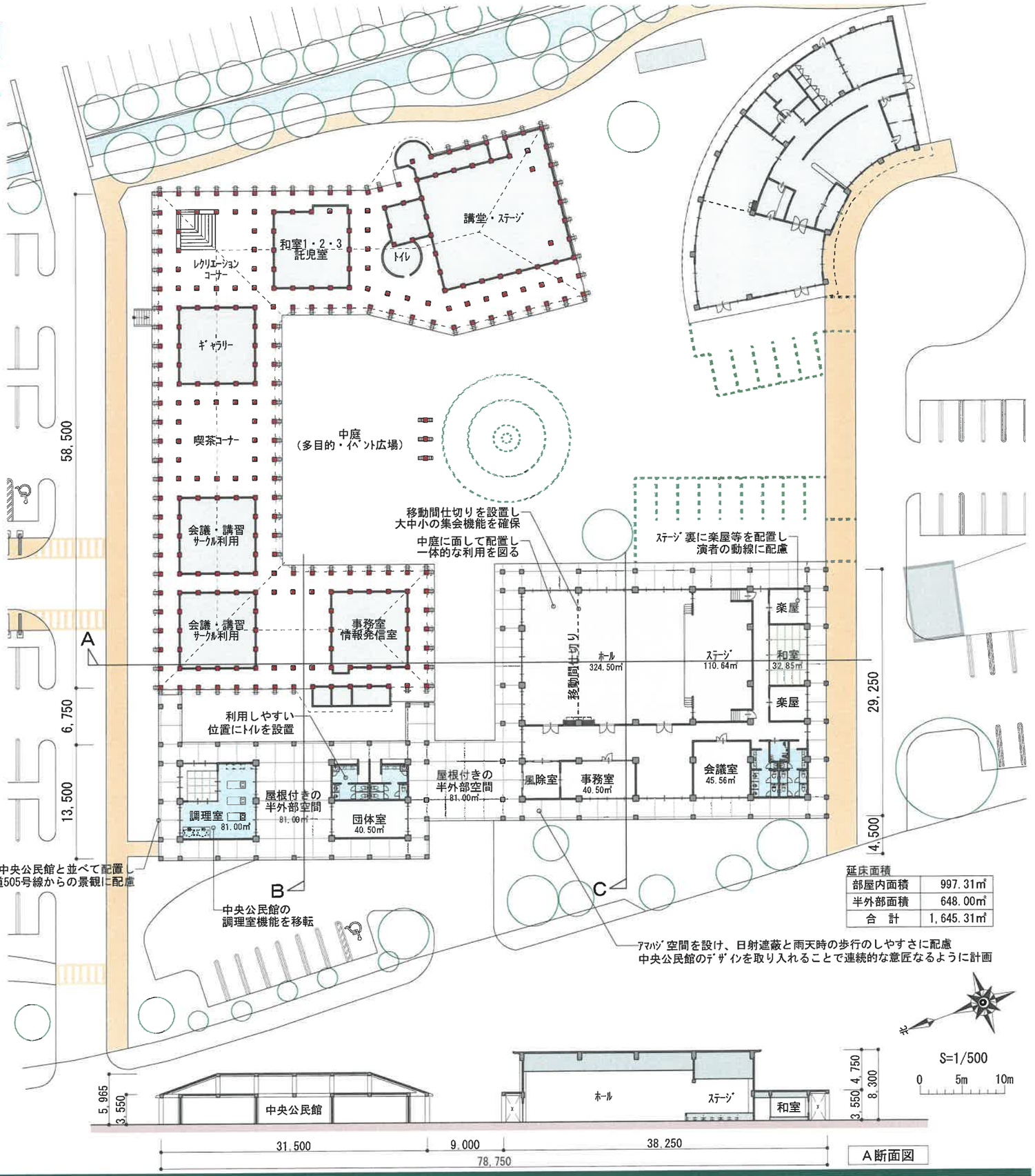
B断面図　S=1：200



B断面図



C断面図



A断面図

延床面積

部屋内面積	997.31㎡
半外部面積	648.00㎡
合　計	1,645.31㎡

今帰仁村保健センターについて

1. 今帰仁村保健センターの役割

これからの今帰仁村保健センターの機能について、２つの大きな役割を担うことを前提として考える。

1）診療室　：　集団検診と健康相談に特化した健康管理に関わるまちなかの拠点をつくる

・集団検診ホール：　年間延べ1400人（R4年調べ）、さまざまな検診の利用者が訪れている。
既存利用と同様に利便性を考慮し、出入口に近い集団検診ホールを同じ場所で利用できるようにする。

・機能回復訓練室　：　一部、健康相談室と併用する。
集団検診ホールを使用していない時の複合利用については、関係者と協議して有効活用できるようにする。

・健康相談　：　医食同源などによる、健康長寿を目指した健康管理の指導を定期的に実施する。

2）子どもの居場所　：　保健センターに子どもの居場所（食事、遊び場、宿題など）を整備する

・保健センターの約半分の面積を子どもの居場所に関連する機能にリノベーションする。
・北山文化圏センターの公共施設は、多様な子どもの居場所を提供する。
・同所の子どもの居場所は、これまでにない機能として食事や遊び、宿題など、落ち着いた時間を過ごすことができる場所を提供する。
・小さな図書室（今帰仁村図書館分室）を設け、宿題や調べものができるようにする。

2. 今帰仁村保健センターの再生方針

1）機能再編計画に基づき、改修及び長期修繕計画の方針を示す

・内装改修により新たな機能を付加する保健センターは、築後20年を経ており、ちょうど大規模修繕等による必要な修繕を実施するタイミングにある。
・機能面によるリノベーションの他、建物の長寿命化計画を検討するとともに、ライフサイクルコストの見直しによる修繕費など、財政負担の平準化を目指した将来的な建物利活用の方針を示していく。

2）北山文化圏センターとの一体性・連続性

・中央公民館と新コミュニティセンターの連続的な利用が可能な配置とは異なる、敷地内で独立した建築物となる保健センターは、既存のピロティを撤去し、新たに緑の回廊でコミュニティセンターや周辺駐車場など、北山文化圏センター全体とつながることができる。
・緑の回廊でつながる保健センターは、歩行空間を利用することで安全を確保し、雨や日照りから歩行者を守ることができる。

3. 今帰仁村保健センターの課題

1）福祉保健課の業務移行による、利活用方法のみなおし

・役場庁舎の新築に伴い、福祉保健課が保健センターから移動した。施設全体の利活用の見直しが迫られている。

2）経年による劣化の進行

・築後20年を経て、躯体、防水等の劣化が進行している。

3）魅力的な子育て世代の居場所づくりが急務

・緩やかではあるが、村の人口減少・少子高齢化が進行している。
・若い世代がくらしやすい環境づくり「豊かな自然」「産業振興」「生活利便性の向上」の一役を担う、子育て世代の拠点となる場を整備する。

4. 今帰仁村保健センターの再生計画

● **竣工から約20年を経て、機能のみなおし時期を迎えた保健センターに子どものための拠点を整備する**

【読書室】
本を読んでもらったり、探したり、思い思いに過ごすことのできる読書室

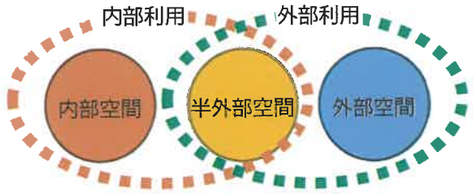
隣接する子どもの居場所と緩やかにつながる空間とする

多目的広場について

1．基本的な考え方

【象設計集団の建築と外部空間】

- 今帰仁中央公民館は、設計者である象設計集団が、沖縄で最初に手掛けた代表作であり、沖縄の気候風土と地域の暮らしを徹底して調査した建築であり、その後、全国・世界で活躍する象設計集団の作風に多大な影響を与えた原点ともいえる建築である。
- 象設計集団の作風の魅力として、建築を建築単体で考えず外部空間と内部空間に有機的なつながりを持たせ、利用によって、多様な使い方ができるようにしている事例が多い。
- 今帰仁中央公民館も同様で、諸室の周囲にある列柱の空間によって、沖縄の強い日差しと強雨から建築を守ると同時に“外部空間”と建築の“内部空間”をつなぐ“半外部空間”としての役割を果たしている。
- 本計画においては、こうした象設計集団の建築思想に倣い内部空間と外部空間との連続性に配慮した一体的に利用できる施設整備を検討する。



半外部の空間イメージ

【曖昧模糊】

- 象設計集団の建築思想として、「曖昧模糊」が挙げられる。現代建築は、建築の利用を検討し、それに合わせて機能を当てはめていき合理的な建築を整備するが、設定された利用をしている範囲では使いやすいが、使い方が限定され、それ以外の利用がされにくくなるなどの問題がある。こうした建築に対する一つの回答として、象設計集団は「曖昧模糊」を掲げ、利用者が工夫することによって、どのようにでも利用できる多様で自由な空間を整備し、そのことによって、利用者の工夫を促し、生き生きとした空間を作り上げている。
- 本設計においてもこうした象設計集団の建築思想に基づき、それぞれの空間が有機的につながって、多様な空間を構成できるように配慮した空間づくりを行う。

多目的広場整備の考え方

2．空間構成の考え方

【3つの広場】

- 本施設の外部空間は、中央公民館中庭、コミセン広場、多目的広場の３つの空間を確保し、これら３つを一つの外部空間と位置付ける。
- これらの広場はそれぞれが単体で存在するのではなく、利用規模や内容に合わせて、それぞれが単体でも３つを合わせても利用できるように連続性と適度な独立性に配慮した設計とする。

【中央公民館中庭】

- 中央公民館中庭は整備当初から中庭として利用されてきたエリアであり、周囲を囲む中央公民館と一体的に利用される外部空間であり、建築との連続性を考慮して整備する。
- 当初は中庭までが建物の外部空間として整備され、その先は樹林が広がっていた。このため、本設計においても敷地を緩やかに区切るため、築山を設けて、中庭としてのエリアが意識できるように検討する。
- 中庭は周囲を建築で囲まれ、空と建物のスカイラインが美しい景観を創出していた。本設計においても屋根の緑化を復元するとともにスカイラインに変化を与える目的でヤシを植栽する。

ヤシの木が屋根と空のスカイラインに変化を与える（建築当初の景観）

【コミセン広場】

- コミセン広場は、コミュニティセンターの前面に位置する広場であり、同施設のホールと一体的に利用できる外部空間として整備する。
- 外部空間と内部空間の間には中央公民館同様に列柱のあるアマハジを整備し、利用の快適性を確保する。

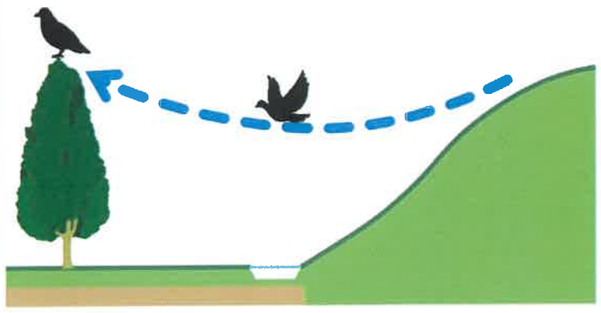
【多目的広場】

- ソーリガー広場は敷地の一番奥まった位置にある広場であり、ソーリガーの前面に位置する広場であり、計画地内では最も広い空間を確保でき、かつ中央公民館と距離が離れていることから、独立した利用も可能であるが、利用規模によっては一体的にも利用できるよう自由度の高い空間として整備する。
- 多目的広場の背後には丘陵地があり、緑に囲まれた空間なっている。広場からソーリガーそして、丘陵地へと連続性を考慮した空間デザインとする。

4．丘陵地の自然を取り込む方法

- 丘陵地の自然を取り込む方法として、野鳥は超出木（ちょうしゅつぼく）を好むという習性があり、これを活用して、敷地内に背後の生き物を誘引することを検討する。
- 超出木は、樹林地の中で、一際高く成長した樹木であり、野鳥はこうした樹木に止まって周囲を観察・警戒する習性があるため、多目的広場の一部に周囲よりも高い樹木を植えることで、周囲から野鳥が訪れ、敷地内で丘陵地の自然を感じやすくなる。
- 丘陵地には季節に応じてさまざまな野鳥が訪れると想定され、これらを敷地内に呼ぶ混むことを検討する。

飛来が期待されるアカショウビン


多目的広場に丘陵地の自然を引き込むイメージ

ソーリガー及び水路について

1．ソーリガー周辺整備の基本的な考え方

【ソーリガーの由来】

- 計画地にはソーリガーと呼ばれる湧水から水が湧き出ており、「清い水」（＝ソーリ）を語源としている。
- 現在でも豊富な水量を誇っており、隣接する工場で利用されている。
- ソーリガーは、現在でもこの場所で遊ぶ子供たちの姿を見かけることがあり、世代を超えた多くの村民から親しまれている。

【自然環境としての価値】

- 人間を含め、生物にとって、水は生命維持になくてはならないものであり、水場があることによって、多くの生物に生息環境を提供することができる。計画地内にこうした湧水が流れていることは、大きなポテンシャルであり、これを活用して、計画地内に豊かな自然環境を育むことを検討する。

2．空間構成の考え方

【人の関りと自然環境】

- 一般的に人が立ち入ることは、生物の生息にとって、大きなインパクトとなり、生息が脅かされるなどの問題が生じる可能性がある。
- このため、計画地内のソーリガー周辺は、人の利用を最小限に抑え、自然を守るエリア、人が積極的に利用するエリア、人が鑑賞して楽しむエリアなど、人の利用ごとにエリア区分し、それぞれが干渉しないよう留意して空間配置を検討する。

【歴史的風致景観の復元方法】

- 計画地内のソーリガーは過去にカー（沖縄の井戸）となっていたことが、確認されている。
- これらは古写真を探すとともに、見つからない場合は当時を知る地域住民へのヒアリング通して、往時の姿を探り再現する。

3．各部整備方針

【花の小径】

- 中央公民館とソーリガーの水路の間は、樹林と雑草地になっており、水場がハブを集め、雑草地が格好の生息地となっている。このため、たびたび公民館でハブが確認されており、安全上のかだいとなっている。
- 水路と中央公民館で高低差のわりに距離が近いため、水場を直接利用しにくい状況となっている。
- このため、このエリアはハブ対策として雑草を除去したうえで、サガリバナ等、花木の並木を育成し、利用者が水と緑・花の景観を鑑賞して楽しむエリアと位置付ける。
- サガリバナは夏場の夜に花を咲かせ、芳香も楽しむこと楽しむことができるため、中央公民館の夜間利用者の楽しみを増やす効果が期待される。

サガリバナ

【徒渉池】

- 芝生広場の広がりに面し、高低差の少ないこのエリアは、利用者が直接水面に降りて水遊びをする空間を確保しやすい状況となっている。
- このため、このエリアはかつて沖縄の湧水の特徴的なカーをイメージさせる石段の水遊び場を設け、子供たちに水に触れ合う機会を提供する水遊び場と位置付ける。
- 次項のソーリガービオトープと明確に位置を分けることで、自然保全・観察のためのエリアと子供たちが水に触れて遊ぶという異なるアクティビティの双方を満足させるよう配慮する。

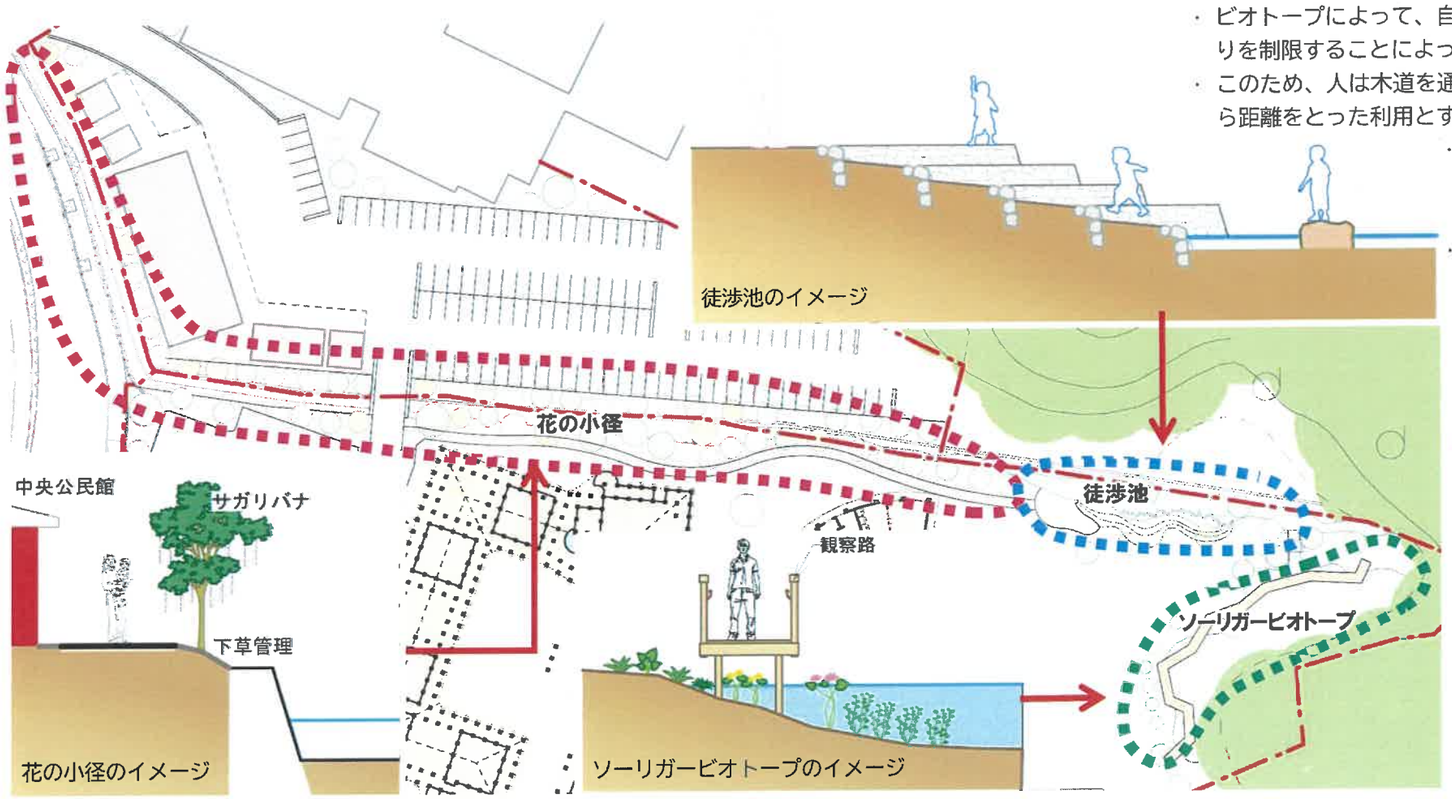
水とのふれあいのイメージ

（設計　象グループ）

【ソーリガービオトープ】

- ビオトープによって、自然を復元するこのエリアは、自由な人の出入りを制限することによって、生物が生息しやすい環境を整える。
- このため、人は木道を通って自然観察を行うこととし、地面や水面から距離をとった利用とする。
- また、水深については、徐々に深さが移り変わっていく環境推移帯（エコトーン）を意識し、より多様な生物の生息空間を確保する。
- 木道のルートについては、自然観察会等を意識し、この施設で自然観察会を実施した時に特徴的な自然が照会できるよう配慮したコース設定とする。

自然観察路のイメージ



4．自然を“守り”・“育てる”方法論

【外来生物の除去】

- 計画地内のビオトープは現在、ホテイアオイやボタンウキクサが水面を覆うことによって、水中の溶存酸素（DO 値）が減少し、また、植物体が枯死することによって、水の腐敗の原因となっている。
- このため、定期的な水草の除去が必要不可欠である。

【村民と共に守り育てる】

- 上記の水草の除去を実施するにあたり、可能であれば村民参加で実施することを提案する。周辺の学校や自治会等に呼び掛けて、住民自らが環境を維持することで、ソーリガーと地域住民の接点が生まれ、さらに愛着持つ効果が期待される。

駐車場及びエリア内動線について

■駐車場・車道

・既存の中央公民館と新築のコミュニティセンターの一体的なつながりを確保するため、駐車場は国道沿いの北側にまとめて配置する。
・国道からの進入位置などに関しては、関係機関との協議が必要であり、暫定的な位置として計画している。
・車道と歩道をできるだけ分離し、歩行者の安全性に配慮している。
・主要な歩行者経路は、屋根の付いた半外部通路としている。
・ユニバーサルデザインに配慮して、ゆったりした駐車マスを確保している。
・車椅子利用の運転手のために広めのマスの車椅子駐車場を配置している。

■歩行者用通路

・建物は原則として豊かな半外部空間を設けているため、強い日差しや雨をしのぎながら移動できる。
・建物を相互につなぐ歩行空間は屋根のある通路とし、屋根部分の緑化などで「緑の回廊」として整備する。
・中央公民館とコミュニティセンターの間に大きな屋根のかかった広場を設け、メインのエントランスとする。
・保健センターまでの動線は、屋根付きの「緑の回廊」とする。
・公共施設の半外部や広場では、産業施設ゾーン利用者による休憩・散策などの回遊性を促す効果を期待することができる。

■つながる広場

・中央公民館の中庭、コミセンの広場、ソーリガーに囲まれた多目的広場は、敷地の中央部でつながり、多様な利用が可能である。
・広場は各施設をつなぎ、施設の半外部空間と連続して、使い方の幅を広げている。

■水路沿いの遊歩道

・ソーリガー沿いには、ゆっくり歩ける遊歩道を設ける。地域の人たちの散歩に利用されることを期待している。